

スキゾフレニとしての『嘔吐』—サルトルと ドゥルーズ-ガタリー

鈴木, 正道

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

創刊号

(開始ページ / Start Page)

95

(終了ページ / End Page)

110

(発行年 / Year)

2004-02-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002801>

スキゾフレニとしての『嘔吐』

—— サルトルとドゥルーズ-ガタリ ——

鈴木正道

序

サルトルが実存主義的精神分析とマルクス主義的分析を用いてフロベール論『家の馬鹿息子』の第一巻と第二巻を出した年の翌年1972年、ジル・ドゥルーズは、フェリックス・ガタリとともに、『アンチ・オイディプス』を出版し、フロイト-ラカンの精神分析と弁証法を批判した。サルトルが、自由と自由の相克の解決として家族愛的な友愛を提案して世を去った1980年に^①、彼らは『千の高原』を発表し、微粒子のブラウン運動の如き欲望の動きを提示し、その攻撃的駆動力を称えた。

こうしてポスト構造主義の旗手とされた二人の思想家は、『存在と無』および『弁証法的理性批判』の著者に異を唱えるか、あるいは彼を飛び越えてしまったかの如く、自分たちの思想を展開した。しかし興味深いことに、サルトルの小説家としてのデビュー作『嘔吐』(1938年)に、ドゥルーズとガタリの思想に合い通じる点が見出されるように思われる。

この作品は1943年に発表される『存在と無』を先取りしたといわれるものの、その存在論では割り切れぬ曖昧なものを含んでいる。またサルトルが精神分析や弁証法を自らの方法論として練り上げる以前に書いた作品である。いわばサルトルの理論的枠組み以前／以外の部分に、後の世代の思想と交わるものが感じられるのである。本論では、サルトルの『嘔吐』、特に作者の分身とみなされる主人公にして語り手のロカンタンを、ドゥルーズとガタリの思想の軸—遊牧民、マイノリティ、戦争機械、スキゾフレニーに沿いつつ検討して、両者が交わることの意味を探りたい。

遊牧民

ドゥルーズとガタリは『千の高原』で、かつて強大な専制君主帝国を作った定住民〈sédentaires〉と辺境にあって帝国を脅かした遊牧民〈nomades〉を対照させる。この区分は理念的に、国家、社会の枠組みの中に収まった生き方としての定住性、それを超えた動きとしての遊牧性として現代にもあてはめることができる。前者は領域を制限すると言う意味で属領化〈territorialisation〉、後者は制限を超えるという意味での脱属領化〈déterritorialisation〉の動きを伴う。定住民の属領化された空間は、道が整備され、区分されていると言う意味で線条空間〈espace strié〉と呼ばれ、遊牧民の移動する空間は固定した経路がないという意味で平滑空間〈espace lisse〉と称される。遊牧民は制限された空間を逃走線〈ligne de fuite〉を描いて逃げるのである。またドゥルーズとガタリは、絶対的権力を頂点に階層を成す専制君主制の社会構造、さらに古代から現代資本主義に至るまで存続する、超越的価値を頂点に階層を成す価値体系を枝分かれした樹木にたとえ、他方、権力、価値、欲望が収斂せずに、互いに連絡し、干渉しあう構造を、根茎（リゾーム）にたとえた³²。階層的な発想が、アリストテレスの生物分類以来、家系図、ダーウィンの生物分化表などに見られる、西洋の伝統的な樹形図の発想であるのに対して、最近の発見である脳の機能や近年注目されるネットワーク型組織は、根茎（リゾーム）型の組織を示していると言える。前者は定住民の発想を、後者は遊牧民の発想を象徴している。

この視点からまず「ロカタン」という主人公の名前を考えてみたい。普通名詞で〈roquentin〉とはやや古い表現で、語源的には「乾いた音をたてる」、「軋む」、「咳をする」という意味の語根〈rokk-〉を含むアングロ・ノルマン語の〈rokerel〉から来ていて³³、「若者ふる老人」を意味する。この単語はまた「諷刺歌を歌って歩く歌手」を指す。サルトル自身は「世界中を旅した男」を連想して主人公をこう名づけたと言っている³⁴。インドシナ、日本、ロシア、北アフリカなどを遍歴した後、ブヴィルというノルマンディの町（モデルはサルトルが1931年から1936年まで、高校教師を務めたルアーヴル）にやって来て、そこのブルジョワ連中をアグレッシヴに皮肉る男こそアントワーヌ・ロカタンである。彼はロルボンなる人物について研究するためにこの町に滞在し

ている。研究に挫折した時、彼は再び去って行く。この意味で彼は定住民ではなく、遊牧民である。

他方、「ブレイヤード版」の編者によると、『19世紀ラルース』は、〈roquentin〉の第一義として、「他の様々な歌の断片をつなぎぎして作った滑稽な歌」を挙げている。サルトルの作品全般に多かれ少なかれ言えることだが、編者及びジュヌヴィエヴ・イットが指摘する通り、特に『嘔吐』は間テキスト性に富み、他の様々な作品の断片、実在あるいは架空の引用、歌の断片などを数多く含んでいる⁽⁵⁾。例えば、『嘔吐』で引用される、ロルボンに関する、歴史家ジェルマン・ベルジェ（実在）によるメモ（OR., p. 18）は、サルトルが百科事典からの情報、及びベルジェ自身の他の人物に関する著作を切り貼りして作り上げたものである（Cf. OR., p. 1740）。ロカンタンが図書館で読む『ウジェニ・グランデ』は数節、断続的に引用されている（OR., pp. 58-61）。デカルトの「我思う、ゆえに我あり」はパロディ化され、様々に形を変えて登場する（OR., pp. 119-121）。ロカンタンに存在の偶然性から逃れることを可能にするラグタイム〈Some of these days〉（1910年、シェルトン・ブルックスが作詞作曲。ソフィー・タッカーの歌によって大ヒット。Cf., OR., pp. 1746-1747）は随所に現われるが、これもブルーストにおけるヴァントゥイユのフレーズをパロディ化したものと考えられる。あるいは〈roquentin〉のもう一つの語義「流しの歌手」との連想もあるだろうか。

ドゥルーズとガタリは、遊牧民の芸術手法を象徴的に表すものとしてパッチワークを挙げている。それぞれの機能を担った縦糸と横糸が、限定された線条空間を作り出す織物とは異なり、パッチワークは、様々な布の断片をつなぎ合わせたもので、その組み合わせは無数の可能性を持ち、作業自体も無限に続けられる可能性がある。その意味で平滑空間を成すと言える（MP., pp. 593-596）。さまざまなテキストをそのまま、もしくは手を加えてつなぎ合わせたパッチワークとしての『嘔吐』は、無限に間テキスト性を広げる可能性を持つ、遊牧民的な要素を備えた作品と言えはしないだろうか。

マイノリティ

ドゥルーズとガタリは、定住民の特性としてマジョリティを、遊牧民の特性としてマイノリティをあげる。彼らにとってマジョリティ／マイノリティとは

数の多少の問題ではない。マジョリティとは適合すべきモデルのことであり、それに対してマイノリティはそのようなモデルを持たずに「生成〈devenir〉」する「過程〈processus〉」である⁽⁶⁾。定住民の社会が、その安定性のためにモデルへの適合を成員に求めるのに対して、遊牧民の群れは制限のない空間を移動しつつ、変化し続ける。

サルトルは、ブルジョワ階級とは自らを普遍階級とみなす人々だと述べる⁽⁷⁾。語源的には市の立つ大きな村〈bourg〉に住む者がブルジョワであるから、ブルジョワとは定住民であり、またサルトルにとってのブルジョワは、モデルとしての普遍性をもって任ずるがゆえにドゥルーズ的な意味でのマジョリティであると言える。サルトルのロカンタンは、働かなくとも自分の研究をしながら生活ができ、それなりの身なりをしている限りにおいて、ブルジョワに属するはずだが、ブヴィルのブルジョワのモデルに従わないという意味でマイナーである。家族もなく、一人でホテル住まいをしている孤独な人間として提示される彼は、徹底的に反ブルジョワとしてふるまう。日曜日に散歩をして、型どおりの挨拶を交わすブヴィルの町のブルジョワたちを彼は皮肉る。長身の彼は、帽子の群れを見下ろす。「時々、そのうちの一つが腕の先で宙に舞い、脳天の柔らかなきらめきを露にするのが見える。それから少しして、重々しく飛んで着陸するのだ (OR., p. 54)。」ただひたすらモデルに従うマジョリティは滑稽な自動人形でしかない。

あるいはモデルに従うことを強要するブルジョワを、ロカンタンは素っ気なく撥ねつける。カフェでロジェ医師は浮浪者をなぶり者にして笑う。浮浪者もへつらって笑う。ロカンタンは笑いに加わらない。医師と彼はにらみあう。「それでも顔をそらしたのは彼の方だ。一人ぼっちの、社会的に何の意味もない奴を前にして、ちょっとばかりびびったわけだ (OR., p. 81)。」普遍階級たるブルジョワは、それに属さぬ者も、異常者として従属させようとする。しかしマイナーな外部者はモデルに従うことを拒否する。

ところで『嘔吐』にはもう一人マイナーな主要人物が登場する。「独学者」である。ブヴィルの町で執行官の事務員として働く彼は、同性愛的傾向を持つという点でマイナーである。当時のフランスの一地方都市における良き市民というモデルから逸脱しているのだ。ささやかな地位に甘んじて、毎日図書館に通い詰める彼は、「遊牧民的」であるとは言いがたいように見える。しかしついに、図書館において自分の同性愛的傾向を抑圧からはずして、文字通り叩き

出された彼は、少なくともロカンタンの想像によれば、ブヴィルの街中をさ迷い歩く (OR., pp. 194-202)。こうして彼は「遊牧民」となる。

戦争機械

ドゥルーズとガタリにとって、欲望とは機械装置の組み合わせである。欲望が抑圧の枠を逃れていくとき、その激しさゆえに、彼らはその組み合わせを「戦争機械」と呼ぶ。「戦争機械」と称されるからといって「戦争」を目標とするわけではなく、創造的な攻撃性を形容する表現である。枠に収まらないその勢いゆえに「戦争機械」とは「国家装置」でなく「遊牧民」に起源を持つ。遊牧民は戦争機械として国家という装置を外から脅かしつつ、自らは変容していく。それに対して国家が戦争機械を自らの中に組み込んでしまったとき、国家は破壊を伴った恐るべき装置となるのである (MP., pp. 280-283)。

マイナーな遊牧民であるロカンタンが、ブヴィルのブルジョワたちのモデルに従うことを拒否し、彼らを嘲弄する様はまさに戦争機械の攻撃性を備えていると言える。これを端的に表しているのが、市立美術館の訪問の場面である。ロカンタンは、肖像画として描かれたかつてのブヴィルの名士たちを嘲けり、美術館を去るときに言う。「さらば美しき百合たちよ。描かれた小さな聖所の中に収まった、実に繊細なる百合たちよ。さらば美しき百合たちよ、我が誇り、我が存在理由よ。さらばろくでなしどもよ (OR., p. 113)。」市立美術館に恭しく飾られた歴代のお偉方の価値を認めないということは、現在町に暮らし、時折り美術館を訪れる良き市民たちを侮辱することでもある。

あるいは図書館で同性愛行為を摘発された「独学者」が司書に殴られた際に、彼をかばって司書を押さえつけるロカンタン (OR., pp. 197-198) はまさに機械のような圧倒的な力を見せつける。これは司書の暴力ばかりでなく、正義を振りかざしながら、事件に酔いしれ、司書をたきつける周りの人々に対する異議申し立てでもある。しかしそれは単に暴力を制圧して場を治めようという義侠心を表した行為ではないように思われる。「僕は何も言わなかったが、奴の鼻を殴って、ぼこぼこにしてやろうと思った。」大柄な流れ者は、まさに戦争機械としてブヴィルの正義を攻撃する。

それに対して人間を愛し、ヒューマニストをもって任ずる「独学者」は、一見気の弱い従順な男である。同性愛行為の摘発に対して、憤然と否定して見せ

るものの、殴られるとくじけて退散する。「真面目な場所」に「教養を身につけに来る」人たちの一人である女性は叫ぶ。「私には子供はいませんよ。でも自分の子供たちをここへ勉強しよこし、彼らが落ち着いて安全な場所にいると思込んでいる母親たちが気の毒ですよ。何も尊重せず、子供たちが宿題をするのを邪魔する怪物がいるんですからね (OR., p. 196)。」彼は、今や「子供たちの敵」としてブヴィルの良き市民たちを脅かす存在である。図書館を追われ、自分の部屋に帰ることもできずに町を彷徨う欲望機械は戦争機械となった。モデルに従うことを拒否するマイナーな機械とモデルに従えないマイナーな機械。両者は一つの系列をなす。

国家装置

市町村は国家装置の部品を成す。ブヴィルの町は、石炭及び木材の荷降ろし港として国家の産業の発展に貢献し、また 1914 年の大戦の際には、国家に息子たちを奉げた (OR., p. 100)。こうしてロカンタンの攻撃の標的となるブヴィルの町のブルジョワ、とくにその立役者たちの背後には明らかに国家装置が見て取れる。市立美術館において、ロカンタンが特に、その短軀をあげつらって嘲弄した肖像画は、オリヴィエ・ブレヴィニユ (Blévine) ; 文字通りは麦と葡萄。まさに郷土としての大地を連想させる) である。学生時代にパリ・コムヌを目の当たりにした彼は、国家秩序の再建に生涯を奉げることを誓う。彼は父親の綿の卸売業を継いだが、政界に進出して衆議院議員となった。「彼は有名な演説で言った。『国は、この上なく重い病を患っております。指導階層がもはや指揮をとろうとしないのであります。(…) 私はしばしば申しました。指揮をとることはエリートの権利ではありません。主要な義務なのであります。』」黒い口髭を生やした、くすんだ顔色の彼は、少しモーリス・バレスに似ている (OR., pp. 109-110)。あるいは父親が国防大臣を務めた、ブヴィルで最も富裕な卸売商人であるジャン・パコムは、バレスの読者だった (OR., pp. 100-102)。バレスが、『根無し草』(Les Déracinés) (1897 年) において、共和主義思想に浮かされて郷土との絆を断ち切り、パリに出てきたものの、野心かならず破局に至る若者たちを描いたことを思い起こそう。枝分かれした根を大地にしっかり張ること、それはまさにドゥルーズとガタリにおける定住民のイメージである。反ドレフュスにして対独復讐主義の愛国主義者、ブランジェ

派の議員であったバレスは、戦争機械を同化した国家装置の象徴とも言えよう。

このバレス自身に対してもロカンタンは敵意を表すが、それは意味深長な夢という形を取る。「僕はモーリス・バレスの尻をたたいた。」ロジェ医師との睨み合いの前の晩のことである。バレスがロカンタンを含む三人の兵士のそれぞれにすみれ〈violettes〉の花束を配る。バレスが、一人の顔の真中にあいた穴に花束を差し込もうとすると、その兵士は逆にバレスの尻にそれを差し込んでやると宣言する。三人はバレスのズボンを脱がせて尻をたたき、さらにそこにすみれの花びらで愛国者同盟のデルレードの顔を落書きする (OR., p.72)。ブヴィルという一地方都市を部品として動く国家装置に対する遊牧民の反抗がファンタズムとなって現われる。

サルトルとフロイト

他方、このロカンタンの夢は、サルトル自身の精神分析に対する微妙な態度を示しているように思われる。『嘔吐』の直後(1938年)に書かれた『一指導者の幼年時代』において、語りは一方で様々な場面のフロイト的な解釈を促しながら、他方ではそれをばかばかしく見せている。結局主人公リュシアンが、精神分析に感化され、学校の教師によって迷いから覚まされることになるのである。バレスに関する夢も、『一指導者』におけるほど明確でないにせよ、こうした両義性を備えているように見える。前者に従えば、バレスは同性愛の父親であり、バレスが三人のうち一人の顔にある穴にスマイレ〈violettes〉を差し込むのは強姦(〈violer〉)の象徴であり、バレスの尻を叩くのは復讐をかねた逆方向の行為であるということになろう。しかしそれが全て馬鹿げたこじつけだということも可能なのだ⁽⁸⁾。

サルトルが『嘔吐』の前身『メランコリア』を執筆していた1933年頃、つまりサルトルがルーアールに、ポーヴォワールがルーアンにそれぞれ高校教師として勤務していた頃、彼らはフロイトの理論に対する魅惑と反発をすでに感じていた。

我々の矛盾の一つは、我々が無意識を否定していたことである。それでもジッド、シュルレアリストたち、そして我々が抵抗したにもかかわらず、フロイトまでが、あらゆる存在の中に「砕くことのできない闇の核」が存

在すると我々に確信を抱かせていた⁽⁹⁾。

後にサルトルは実存主義的精神分析を提唱する。無意識ではなく、個人が自由に行なう「本源的選択」が抑圧の原因となるから、その選択を突き止めて認めた上で乗り越えることを目指す、という弁証法的なものだ。「無意識」と「根源的選択」とは根本的に異なるのかどうかは疑問の余地があるだろう。根源的選択がいかに本人の自由に基づいて「意識的に」行なわれようと、本人がそれに気付いていないからこそ、それが自由を疎外しているのである。サルトルは『存在と無』において、「対象を意識しているが、主題化していない」意識を「非措定的意識」としており、根源的選択もこの非措定的意識とみなされるが、それでもフロイトの言う「意識に上っていないが、心の奥底に抑えつけられている」無意識との違いが決定的なものであるかどうかは疑問が残る。事実、サルトルはその後『シナリオフロイト』⁽¹⁰⁾、フロバール論『家の馬鹿息子』⁽¹¹⁾の執筆を通して、「無意識」という概念を受け入れないまでも、「根源的な選択」がそれほど明確な意識を伴って為されるわけではないことを、認めるようになるのだ。しかしいずれにせよ、『嘔吐』のこの場面は、人間の心の中に潜む「砕くことのできない闇の核」の解明の方法論者としてのフロイトに対する魅惑と懐疑を示唆するものの、その後作者に自分なりの方法論を展開させるほどの、フロイトの強い影響を見せてはいない。

スキゾフレニとパラノイア

サルトルが結局、フロイトの精神分析を「修正」した形で受け入れたのに対して、ドゥルーズとガタリはそれに真正面から異議を唱えたとと言える。『アンティ・オイディプス』において彼らは、フロイトの誤りは、ノイローゼ患者の分析を通して、父親と母親に対する幼少期からの二律背反感情を探り出したものの、全てをそれに還元してしまった点にあるとする。人間は幼少期から既に社会的、政治的影響を、両親を通して、あるいは直接受けるわけであり、親と自分しか住んでいない世界で人格がまず形成されるわけではないのだ⁽¹²⁾。このような還元主義は、資本主義の要請によるものである。資本主義は、欲望を刺激しながらも、肥大した欲望が社会を転覆させないように、また資本の投資された産業が利潤を回収できるように、その欲望を方向付けるように努める。欲

望とはまず母親に対する欲望であり、それを父親がチェックして、社会的に責任をまっとうしつつその欲望を消費にむけるように欲望の主体としての子をしつけるべきだとされるのだ。ノイローゼとは、このメカニズムがうまく行かない場合である。ところでスキゾフレニはこうしたエディップ的構造には収まらない。欲望が抑圧の枠組みを一切越えようとして、現実と乖離するのがスキゾフレニという病気である。欲望が駆り立てられ、同時に抑圧された結果、人格の統一に障害をきたすという意味で、スキゾフレニは資本主義的な病気である。しかし、その抑圧から逃れようとする勢いは、出口を求める過程となるのではないか。こうしてマルクス主義者であるドゥルーズとガタリは、革命の方法論としてのスキゾフレニを展望する。

抑圧からの逃走を目指すスキゾフレニと対立させてドゥルーズとガタリが考える概念がパラノイアである。一般に偏執狂と訳されるパラノイアとはドゥルーズとガタリの定義では、分子的な動きである欲望生産を総体化しようとするものであり、この意味で全てを家族に還元してしまうエディップ的構造はパラノイアである。資本主義以前の専制君主体制においては、絶対的権力が全ての価値基準の中心となり、欲望の方向性を外側から定める。資本主義体制においても、欲望を一定の方向に制御しようとする内面化された力が働く⁽¹³⁾。逃走の過程としてのスキゾフレニは、マイナーな遊牧民の生き方であるのに対して、欲望の集中制御としてのパラノイアはメジャーな定住民の生き方と言えよう。

ドゥルーズとガタリによると、資本主義にはこのように、欲望を方向付けるパラノイ的な動きと、既存の枠から逃れさせようとするスキゾ的な動きとが並存している。その実、ロカンタンはこの二つの動きを具現しているように思われる。資本主義の発達により都市労働者階級が形成された中で、普仏戦争の敗戦、パリ・コミユヌの混乱を経て高まってきたナショナルリズムへの価値統合を象徴し、大地に根を下ろすことの重要性を説いたバレスは、まさにパラノイアの具現である。このバレス及び、彼の信奉者たち（ブヴィルの富裕なブルジョワ）を何かにつけて嘲弄する流れ者のロカンタンは、スキゾ的であると言える。

しかし彼は10年以來、ロルボン侯爵に関して可能な限りの資料を整えたものの、どうしても一貫した人物像が構築できずに呻吟している。ここで注意したいのは、彼が書こうとしているのは歴史書であるが、ロシア、インド、中国、西アジアを巡り、また数々の怪しげな陰謀にかかわったとされるロルボンを彼は「冒険家」とみなしている点である。「冒険家」とは、小説の筋立てのよう

に定められた必然的な人生を生きる人間のことである。そして過去における必然的な人生を蘇らせることで、自分の人生も必然性を帯び、正当化されると考えているのである。(この点で、自分の存在が正当化されていると信じて疑わないブヴィルのブルジョワと変わらないのである。)これは彼の元恋人のアニーが、人生において美が必然的に成就する「完璧な瞬間」があると考え、それを追いかけていたことと並行する。興味深いことに、アニーにそのきっかけを与えたのはミシュレの「フランス史」の挿絵つきの版であった点である(OR., pp. 173-174)。ミシュレは、歴史を実証的な資料によって裏付けながらも小説的な想像力を駆使して記述した歴史家である。アニーにとってミシュレの歴史とは、ところどころ挿入された挿絵において美が必然的に完成する小説であったのだ。こうしてロカンタン、アニーともに人生を必然的な流れに固定しようとするパラノイアに捕われていたのである。ちなみに「独学者」も、図書館の本を全て著者のアルファベット順に読破することで、総体化された知を自分のものにしようと考えている点ではパラノである。

またロカンタンと同時代のサルトルの主人公、ポール・イルベール(『エロストラート』、執筆は1936年ごろで、1939年発行の『壁』に所収)にも触れておこう。彼は、徹底した反ヒューマニズムを掲げ(ロカンタンも「独学者」との会食の際、「ヒューマニスト」というメジャー集団に入れられることを拒む。OR., p. 140)、無差別殺人を企てた点で、マイナーな戦争機械であると言える。しかし神殿の破壊によって後世に語り伝えられるエロストラートと同じように、前代未聞の悪行によって名を残したいとこだわる点で、パラノである。そもそも彼の被害妄想、誇大妄想は、古典的な意味でのパラノイアの徴候を示している。結局彼は、この「冒険」願望から解放されることなく、破滅に至るのである。

逃走線

結局、過去を再び存在させることは不可能であると思いついたロカンタンは、歴史書の執筆をあきらめることになる(OR., p. 113)。そしてこれが、現実を空想された必然性の枠に組みこむことに他ならない「冒険」の放棄につながるのである。パラノの価値の放棄である。その直後の場面に注目したい。自分の部屋を出たロカンタンは新聞を買い、少女暴行殺害の記事を読み、茫然と町の

中を歩く。内的独白⁽⁴⁴⁾によって彼の内面はつづられる。

僕は逃げる，下劣な男は逃走した，犯された肉体。(…)暴行の血なまぐさい柔らかな欲望が僕を後ろから捉える，全く柔らかな，耳の後ろに，耳が僕の後ろに流れ去る，赤茶けた髪，それは僕の頭の上で赤い，濡れた草，赤茶けた草，それはまだ僕なのか，そして新聞はまだ僕なのか(…)
(OR., p. 120)

延々と連なる文において，ロカントンの意識が犯人，犠牲者と混合し，さらにはものとの区別もつかなくなる。欲望が主体としての個性性を失って逃げる。この後，ロカントンの日記は，「何もなし。存在した。」という一行だけ書かれた一日を置いて，その次の日の，「独学者」との昼食，市電，公園のマロニエの場面へと続く。そこでロカントンは存在の偶然性に気が付き，「自由」を実感するのである。しかし内的独白の場面においては，そこまで至ってはいない。あくまでも欲望は逃げるのである。「問題とは，自由の問題ではなく，出口の問題なのだ」とドゥルーズとガタリは言う⁽⁴⁵⁾。サルトルの名を出してはいないが，彼を意識しての言葉であることは疑いえないだろう。サルトルにとって，意識は存在を対象化して未来へと超越していく。これが意識はその存在から自由であるという意味なのだ。しかしドゥルーズとガタリにとって，存在をしっかりと受け止め，それから自由であろうとするような考え方はパラノ的な発想である。彼らにとって重要なのは，方向など定めず出口を求めて逃れることなのだ。それがスキゾフレニであり，マイナーな遊牧民の力であり，場合によってはそれが革命の原動力となるのである。ロールボンという定点を失ったロカントンはあてもなく逃げるスキゾとなる。

その後彼が背負い込む自由とは，『存在と無』で説明される「宣告」としての自由であり，他者だけが妨げる自由，従って他者との相克の中で貫かなければならない自由である。また『弁証法的理性批判』などで軸となる，せめぎあう数々の主体として，歴史という弁証法的流れを担う自由である。ここにサルトルとドゥルーズ-ガタリの考え方の相違点がある。しかし『嘔吐』のクライマックスであるマロニエの場면을準備する場面では，むしろ彼らに共通の感性を見ることはできないだろうか。

小説というスキゾフレニ

歴史書を書くことをあきらめたロカントンは、ブヴィルを去ることを心に決め、今度は小説を書こうかと思いつく。この『嘔吐』の結末は読者に少なからぬ戸惑いを与えた。存在の偶然性に気が付き、自由を見出した主人公が、小説作品という、あらかじめ作者の定めた筋書きに従って展開する、必然の世界を創り出すことで再び自らの存在を正当化しようとするとは、結局父親の後継ぎというアイデンティティによって自己正当化しようとする『一指導者の幼年時代』のリュシアンと同じ道をたどるのではないか、『存在と無』で説明される、自由を自らに隠す「自己欺瞞」に再び陥るのではないか。サルトルが自ら展開する思想に沿って考えれば、この曖昧性は否定しようがないと思われる。しかしこれを、マイナーな遊牧民としてブヴィルで生活してきた男の新たな出発と考えれば、いくらか納得のいく解釈ができそうにも思われる。

ドゥルーズとガタリにとって、パラノ的な定住民の空間とは限定された〈limité〉世界であり、そこでは超越的な掟が、不連続で〈discontinú〉無限の〈infini〉要素を支配する。それに対してスキゾ的な遊牧民の空間とは無限定の〈illimité〉世界であり、そこには連続的で〈continú〉有限の〈fini〉要素が存在する(K., pp. 131-135)。境界の定まった領土内で、専制君主が、互いに知ることができぬほど多くの臣民を支配している空間と、互いに見知った少数のメンバーが群れをなして移動する空間である。

ロカントンは歴史書を書こうとして10年間資料を集めており、モスクワまで赴きもした。実証性を要求される歴史書に書かれる対象はあくまでも現実の枠の中に収まらなくてはならない。その意味で歴史書は限定された世界であると言える。ただしロカントンの歴史書は、小説の筋のような生き方をした「冒険家」を対象としていた。彼の歴史とは現実の枠の中に空想を入れ込むという企てだったのだ。現実という限定の中に、無限の事実が不連続に発見され、その穴を埋めるべく、無限の空想が働く。それを全て統率しようとするロカントンのパラノ的な企ては行き詰まる。それに対して「存在しない」対象を描く小説作品は、空想によって生み出される無限定の世界であると言えよう。この世界はたとえ現実に素材をとっているとしても、作者の創り出した有限の要素が互いにつながりあって成り立つ。こうして小説を書こうと考えることは、スキ

ゾフレニを実践しようということになるのだ。

それでも、歴史書から小説に対象が変わったとしても、作品としての本を書くことにこだわり続けることは、パラノイアックな執着、再属領化ということにならないかという疑問は残るだろう。それに対する答えは少なくとも二つ提案できる。まず、ロカントンの決心はかなり漠然としたものにすぎないという点である。「僕は行く。僕は、自分が漠然としているように感じる。あえて決心をすることができない。もし才能があると確信できれば… (…)

一冊の本。一編の小説 (OR., p. 210)。」もしかしたら、ロカントンはまた考えを変えるかもしれないのだ。

もう一つの答えは、彼が考えている小説作品のイメージにある。「それは鋼 (はがね) のように美しく、硬く、また人々に、自分の存在を恥じ入らせるようなものでなくてはならないだろう (Ibid.)。」ドゥルーズとガタリは、ジョイスとベケットのどちらをも脱属領化の作家と認めながらも、前者はその饒舌と表現の多義性により、世界全体を再属領化しているのに対して、後者はその節制と意図的な欠乏性によって脱属領化を、強度しか残らぬほどに推し進めると述べている (K., p. 35)。ロカントンの作品に関してこれ以上の説明がないのではっきりとしたイメージは捉えられないが、存在の世界にはない、鋼のような作品とは、いわば意図的な欠乏性を推し進めた、強度から成り立つ作品ということにならないだろうか¹⁶⁾。そしてロカントンの決心に先立つ内的独白は、そのジョイス的な性格ゆえに脱属領化がいまだ徹底していなかったと言えるのではないか。

ところで「鋼」とは、『一指導者の幼年時代』のリュシアンが、反ユダヤ主義者としてのアイデンティティを固めた自分を形容した表現でもある (OR., p. 384)。しかし、同じ比喩が感じさせるリュシアン¹⁷⁾の攻撃性が、工場長の跡取り息子にして右翼信奉者という、国家機械に組み込まれた戦争機械の攻撃性であるのに対して、ロカントンの攻撃性は、あくまでも自己の存在の必然性に疑いを抱かぬブルジョワに向けられた、遊牧民的な戦争機械としての攻撃性である。

∴

こうして、『嘔吐』の主人公ロカントンが、いかにドゥルーズとガタリの言う、遊牧民的でマイナーなスキゾフレニアをうかがわせる人物であるかが見て取れるであろう。別の言い方をすれば、この作品では、ドゥルーズとガタリが

批判する弁証法的視点、フロイト的家族還元主義が支配的ではないと言える。

ジャン＝フランスワ・ルウエットは、『一指導者の幼年時代』(1938年)は、自己意識と他者の見た自分の対立、その統合としての自己欺瞞の演技という弁証法的展開によって進行し、それが『存在と無』(1943年)の理論的展開の構造を先取りしていることを指摘している⁽¹⁷⁾。そしてその後サルトルは、倫理学、歴史認識を、既存の価値、制度があらたなる価値、制度によって否定、超越され、それがさらに新たな価値、制度によって否定、超越されるという、統合のない弁証法を展開させていくことになるのである。しかし『嘔吐』において、主人公は人間的な意味付けを失った存在(人間物も区別されない)を前に呆然とする。彼は想像の世界へと逃げるのが示唆されるが、これは弁証法的な否定といえるだろうか。

他方、『一指導者の幼年時代』を初めとして、『ボードレール』(1947年)、『家の馬鹿息子』などでは、主人公の人格形成に関して両親との関係が強調され、さらに父親は社会的、政治的有力者として提示される。いわば、社会的、政治的次元が家族の次元に還元されているのである。特にボードレール論、フロベール論は、実存主義的精神分析の実践例である。『嘔吐』においては、パレスの尻打ちの夢に関しても、またブヴィルの美術館訪問に関しても、主人公の攻撃の対象は国家装置であり、父親の像はその陰からのぞいているにすぎない。そもそもロカンタンは家族のない流れ者として登場するのだ。

存在の問題を扱いながらも、サルトルの作品としては弁証法的ではなく、また欲望が描かれながらも、フロイト的ではない⁽¹⁸⁾『嘔吐』。この段階でサルトルは弁証法的な思考を抱いておらず、フロイトにも無関心だったとは言えまい。いまだ弁証法を自らの方法論として練り上げてはいないとはいえ、『超越的自我』(1937年)以来の、意識が対象へと志向し、その対象を否定的に超越するという存在論は、弁証法的な発想であると言える。そもそもサルトルは、エコール・ノルマル時代の1927年にレオン・ブランシュヴィックのゼミで、即自(ものとしての存在)、対自(意識存在)、存在の偶然性、存在に意味を与える対自という考えを発表しているのである⁽¹⁹⁾。また1921年にフロイトの著作が仏訳されて以来、精神分析は一種の流行となっていた。先のフロイトに関するポーヴォワールからの引用は1933年のものである。

このことは何を意味するだろうか。一つは、サルトルが、ドゥルーズとガタリに30年以上先立って、遊牧民的でマイナーな感性を抱いていたことである。

この感性が小説という多義性を含む形式を通して、いわばパラノ的な弁証法、フロイト主義をしばし脇にのけたのではなかろうか。しかし遊牧性、マイナー性は、ドゥルーズとガタリが指摘しているようにカフカにもあてはまることであり、また「異邦人」をテーマにしたボードレール、カミュにも通じることである。つまりこの感性がそれだけ、時間的にまた空間的に遍在性を持つということである。もう一つは、サルトルが、そして多くの思想家が受け入れた、あるいはそれに捕われた弁証法的視点及びフロイトの思想の、影響力の強さであり、またその重さである。『嘔吐』におけるつかの間の「逃走」にもかかわらず、サルトルは結局両者と格闘し続けることになるのだ。

現在、そのサルトルが疎んじられている。それはつまり、こうした重い、果てしないパラノイアックな格闘が、疎んじられているということかもしれない。それともサルトルの余りにも破壊的なスキゾフレニが不安を呼び起こすのだろうか。

*本文中の翻訳は筆者による。

《注》

- (1) Cf. Jean-Paul Sartre, Benny Lévy, *L'Espoir Maintenant*, Verdier, 1991. 『ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』の1980年3月10日号、17日号、24日号に掲載されたこのベニー・レヴィとの対話におけるサルトルのユダヤ教的な発言は、病と老いで弱った彼がレヴィに操作されて述べたものだという声も上がった。
- (2) Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille Plateaux*, Les Éditions de Minuit, 1980. 以下MPと略す。
- (3) *Le Grand Robert de la langue française*, 2^e édition, 2001.
- (4) 「プレヤード版」の編者ミシェル・コンタとミシェル・リバルカとの対話(1971年)。「プレヤード版」の照会文参照: Jean-Paul Sartre, *Œuvres romanesques*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», (édition établie par Michel Contat et Michel Rybalka avec la collaboration de Geneviève Idt et de George H. Bauer) 1981, p. 1674, «Notice de *La Nausée*». 以下, OR と略す。
- (5) Cf. OR., pp. 1674-1675. 及び Geneviève Idt, *La Nausée. Sartre*, Hatier, «Profil d'une œuvre 18», 1971, p. 71. また短編集『壁』の間テクスト性については, cf. Geneviève Idt, «*Le Mur* de Jean-Paul Sartre. Techniques et contexte d'une provocation», Larousse, 1972, pp. 152-163.
- (6) Gilles Deleuze, *Pourparlers*, Les Éditions de Minuit, 1990, pp. 234-235.
- (7) Jean-Paul Sartre, «Présentation des *Temps modernes*», *Situations*, II, Galli-

- mard, 1948, pp. 17-19.
- (8) 思想上、サルトルがパレスの国家主義に対して敵意を抱いていたため、精神分析のパロディによって彼を卑しめていると考えることも可能であるが、その実、サルトルのこの作家に対する感情には微妙なものがあるようだ。サルトルは、18歳の時ブローニュの森において、当時彼が寄稿していた同人誌『題名の無い雑誌』をパレスに売ろうとして、そっけなく断られたことをプレーード版の編者に語っている (OR., p. 1857)。フロイト的解釈に従えば、そこに父親的役割の人物に対する両義的感情を見出すことが可能かもしれない。
- (9) Simone de Beauvoir, *La Force de l'Âge*, Gallimard, 1960, p. 135.
- (10) Jean-Paul Sartre, *Le Scénario, Freud*, préface de J.-B. Pontalis, Gallimard, 1984. 執筆は 1959 年。
- (11) Jean-Paul Sartre, *L'Idiot de la famille, I, II*, Gallimard, 1971; *L'Idiot de la famille, III*, Gallimard, 1972, nouvelle édition revue et complétée, 1988.
- (12) もっともサルトルも、社会的及び政治状況が家族を通して、個人の「根源的選択」及びその後の様々な選択に与える影響を重視したのであり、フロベール論では特にその分析が広く展開される。ただし、あくまでも幼少期においては両親を通してこうした影響がギュスターヴに及んだとサルトルは考えており、従って父親と母親との関係にこれらの影響を還元していると言える。
- (13) Gilles Deleuze et Félix Guattari, *L'Anti-Édipe*, Les Éditions de Minuit, 1972.
- (14) サルトルは、後に『嘔吐』となる『偶然性に関する反駁書』を執筆中の 1931 年から 1933 年にかけて、勤務先のルアーヴルで講演を行っており、中に「内的独白：ジョイス」と題されたものもある。
- (15) Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Kafka. Pour une littérature mineure*, Les Éditions de Minuit, 1975, p. 19. 以下 *K* と略す。
- (16) 若い頃のサルトル自身が、所有物を最小限しか持たず、ホテル住まいをし、挑発的なテキストを生産していたことも、このことと重なり合うだろう。
- (17) Jean-François Louette, «La dialectique dans *L'Enfance d'un chef*», *Cahiers de Sémiotique Textuelle*, n° 18, «Études sartriennes IV», Université Paris X, 1990, pp. 125-151.
- (18) これは、フロイト的な解釈を受け付けられないという意味でないことは言うまでもない。サルトルが意識的にフロイト的な要素を提示したと考えられる部分が少ないということである。
- (19) Raymond Aron, *Mémoires*, Julliard, 1983, p. 36. また 1926 年には、『エンベドクレス』を執筆中だとサルトルはシモヌ・ジョリヴェに書き送っている。この作品は、主人公が存在の偶然性を発見して呆然とするという、まさに『嘔吐』を先取りしたようなテーマであるが、原稿は残っていない。Cf. *Lettres au Castor et à quelques autres vol. 1*, Gallimard, 1983, pp. 26-27.